

演題番号：D16

前立腺動脈塞栓術が著効した前立腺癌の犬2例

○一色真之，尾形真佑，久本真也，杉山祐一郎，長谷川哲也

加古川動物病院

1. はじめに：一般に犬の前立腺癌の予後は不良から重大であり、高率に遠隔転移を伴うとされる。本院では前立腺癌の2症例において前立腺動脈塞栓術 (PAE) を実施した。いずれの症例でも明らかな抗腫瘍効果が得られた。画像検査所見を基に前立腺癌におけるPAEの有効性について検討する。

2. 材料および方法：(1) 症例1。13歳、去勢雄、チワワ。前立腺腫大と左肺後葉の孤立性腫瘍が偶発的に発見された。前立腺生検を行ったところ悪性上皮系腫瘍(癌)の診断が得られた。肺腫瘍の存在より肺転移を伴った前立腺癌と臨床診断しPAEを実施した(第1病日)。(2) 症例2。17歳、未去勢雄、ミニチュアダックスフンド。血液生化学検査にて肝酵素活性の増加が認められ、CT検査を行ったところ肝臓腫瘍と前立腺腫大が確認された。それぞれ組織生検が実施され、肝細胞癌、前立腺癌と組織診断された。いずれの腫瘍も外科的切除が困難であり肝動脈化学塞栓療法(TACE)とPAEを実施した(第1病日)。

PAEでは左右前立腺動脈を300-500 μ mのトリスアクリルゼラチンミクロスフィア (Embosphere: メリットメディカル・ジャパン) で塞栓した。その後X線検査、超音波検査、CT検査で

経過観察を行った。PAE後に虚血性壊死による空洞領域が認められた場合はそれを差し引いた前立腺容積補正值を前立腺体積として記録した。

3. 結果：(1) 症例1。PAE後の前立腺体積は第34病日で約30%減少した。その後長期間前立腺と肺腫瘍に変化は見られなかったが、第853病日より膀胱内腫瘍と肺腫瘍が急速に増大した。その後患者は第919病日に悪液質および呼吸不全により死亡した。(2) 症例2。PAE後前立腺体積は第15病日で約65%減少した。その後容積の変化は見られなかったが第52病日に肺炎、高窒素血症を生じ、その後多臓器不全を呈して第83病日に死亡した。いずれの症例においても死亡に至るまで前立腺腫大に起因する臨床症状は認められなかった。

4. 考察および結語：PAEにより前立腺癌を局所制御することで良好なQOLが得られた。また、症例1ではPAEによる抗腫瘍効果は転移巣にも影響した可能性がある。現在の前立腺癌治療(外科手術、放射線治療)は効果が限定的かつ高率に合併症を伴う。これら治療が困難な患者でもPAEは実施でき同程度の治療効果が得られる可能性がある。